



平成25年度全国公共図書館研究集会開会式（平成25年10月24日 村山市 甌葉プラザ）

## 館長からのメッセージ <不易流行と図書館>

80万（冊）の知の財産をあまねく県民に親んでもらい、生かしていただくことを念頭に運営の改善を進めている。現在の図書館は平成2年7月に新館としてオープンした。それ以来大きな変化を経ることもなく今に至っている。県民ニーズの多様化や情報化社会等の急激な変化に対応するには、すぐにも改革を行う必要がある。即効性を期し直ちに実施することと、中長期視点に立ち進めるべきことがある。

前者の取組みを一部あげれば、①来館が不便な遠方の方（例えば県境の町や地域など）の利用を大幅に増やすため相互貸借やインターネット予約等の広報・普及に力を入れる。②貸出冊数を6冊から10冊に増やす。③親子読書スペースを設置する。④フェイスブックを導入する。⑤企画展を年間通して行い、また様々なコーナーを設けることなどにより読書への導きと利用者の掘り起こしを行っている。

後者は重い課題である。郷土資料の充実と周知・活用、専門性の維持と一般図書利用のバランス、子ども読書活動への対応、市町村図書館等への支援、電子書籍の導入などがある。特に全国的にも低い司書職員の充実が最も重要である。

また閉館日や開館時間をどうするか検討も必要だ。このような具体的な施策も含め、今年中には県立図書館の将来ビジョン、あり方を明確にしたい。

全国的にみれば後れた動きともみられようが、一時の流行にとらわれず地に足をつけ取り組んでいきたい。人が多く集まる交流型拠点ではなく知識と情報が集まる知の拠点を目指すことになろう。新しい取組みのなかにも本質的なものは変えない、いわゆる「不易流行」を忘れずに、老若男女が等しく利用しやすい県立図書館であるべきだ。

そもそも表題で使っている図書館報の「圖」の字は「囗」と「畺」でできている。「囗」はかこむの意味、「畺」は米倉の象形でもある。米は命を維持し活動を支えるものといえる。そのような意味が転じて「書」すなわち知識や教養、知恵を蓄えることは精神と生活を豊かにし人生にいろどりを与えるであろう。是非、多くの県民に読書の楽しみを知って感じてほしいものだ。「館」はそのための基地であり、私たちは図書館としての役割をきちんと果たしていきたい。

（館長 斎藤 敏彦）

館長からのメッセージ.....	1	手づくり絵本コンクール・お知らせ.....	5
全国公共図書館研究集会.....	2	県立図書館がお手伝いします.....	6
図書館の展示あれこれ.....	3	県立図書館の現況.....	7
山形の作家たち・赤ちゃんと本.....	4	便利なサービス・交通案内（当館へのアクセス）.....	8